

はしがき

私たちの身の回りには、成句や故事成語が溢れています。私が幼い頃は、助産師であった母から「案ずるより産むが易し」とよく言われ、あれこれ悩まず、まずはやってみなさいと励まされました。高校生くらいになると国語の授業で「上善は水の如し」という名言を知り、水は万物にとって重要であるのに、自己主張せず、さまざまに形を変えて適応し、みずから下方へと向かうという道徳を老子が説いたことに感動しました。この言葉は今では、日本酒の商品名にもなっています。

このほかにも、私たちはさまざまな形を通して日常的にこうした言葉に接していて、私たちのコミュニケーションにとって不可欠のツールとなっています。その中には、由来や意味のよく知られた言葉もありますが、意外にその来歴や意味するところを知らずに使っていることも多いのではないのでしょうか。本書各章は、まず成句・故事成語の来歴を知ることから始まります。

本文中には扱えませんでした、「鶏口牛後」(寧ろ鶏口と為るも、牛後と為る無かれ)『史記』蘇秦伝)という故事成語があります。これは大きなグループの一員でいるよりは、小さなグループでも一番でいるほうが良いという意味です。戦国時代末期に、縦横家の蘇秦が小国の韓の王に対して、強国の秦に降る(牛後)よりも小国の王(鶏口)として秦と戦うのが良いと勧めた時のエピソードとして出てきます*。この語の背景には、戦国時代末の外交合戦である「合従連衡」の歴史があります。

*もとは「鶏尸牛従」(戦国策)といって、「鶏尸」(鶏のリーダー)となるべきで、「牛従」(群れに従う子牛)となる

べきではない、という。

また「画竜点睛」（『歴代名画記』）という故事成語があります。南北朝時代の南朝梁の皇帝であった武帝は仏教に深く帰依したことで有名で、その政策の一環で仏画の得意な画家であった張僧繇に命じて寺院に裝飾を施させました。当時の首都建康に置かれた安樂寺に張僧繇は四匹の龍を描きましたが、黒目（睛）だけは描かずにいました。人々に頼まれて二匹の龍に黒目を入れると、稲光りとともに龍は空高く飛んで行ったと言います。ここから画竜点睛は、最後の大事な仕上げのことを意味するようになります（また逆に、肝心な仕上げをせず詰めが甘いことを「画竜点睛を欠く」と言います）。ちよつと信じがたいエピソードを含むこの語が生まれる背後には、実際に行われた南朝梁武帝（皇帝菩薩とも呼ばれます）の仏教政策が関わっていました。

最後に「人口膾炙」という語も、まさに人口に膾炙しているのではないのでしょうか。多くの人が口にして広く知れ渡っていることを意味しますね。これは晩唐の詩人林嵩の書いた序文（『周朴詩集序』）に出てくるのですが、「人口」は人の口、「膾」は肉のなます（第2章でも出てきます）、「炙」はあぶり肉を意味しています。ここから当時では、人々はなますや炙り肉を誰もが親しんで食べていたという文化を知ることができます。でもそのお肉は何の肉なのでしょう。

このように、成句・故事成語にまつわるエピソードを紐解いて、そこから中国の歴史や文化を探っていくと、難しいと思われるがちな中国史も、取っつきやすくなるかもしれません。本書はそうしたことを目論んで、手に取って読んでいただけたらと思います。各章は時代順に並んでいます。第1章から順に読む必要はありません。「この言葉知っている！」、あるいは「聞いたことないな」という気持ちを手づるとして、関心のあるところから読んでいただけたらと思います。一つの成句・故事成語から、奥深い中国の歴史に少しでも興味を持っていただければ何よりです。